



令和8年度 静岡県養護教諭研究会夏季研修会

オンデマンド配信 【視聴期間】 令和8年7月27日（月）～8月28日（金）



あいさつ 静岡県養護教諭研究会 顧問校長 村田 一史

困難を抱える子供には、多くの大人が関わり自己肯定感を高めることと、自ら考え自己決定させ問題解決力を育むことの双方が重要である。教員は最後まで寄り添い続ける役割を担う。今回の研修を通して、子供の社会的自立に向けた具体的な指導や支援に活かせる多くの学びが得られることを期待する。



あいさつ 静岡県養護教諭研究会 会長 竹嶋 ゆか

今年度の夏季研修会はオンデマンドでの開催となった。今期は、「つながりを成長の力へ～資質向上と業務の効率化を図り、みんなのウェルビーイングを実現しよう～」をテーマに活動している。本日の研修で、子供たちと養護教諭のウェルビーイングを高めるための具体的な方法を学び、今後の実践へとつなげる一歩となることを願っている。



講演 勇気づけと承認のコミュニケーション

講師 三浦 将 氏



株式会社チームダイナミクス 代表取締役

人材育成・組織開発コンサルタント/エグゼクティブコーチ

大阪府立大学工学部卒

英国立シェフィールド大学大学院修了（理学修士）

教育テック大学院大学特任教授 早稲田大学オープンカレッジ講師

「相手の話を聞くこと」からすべてが始まる

講師はかつて外資系企業のマネージャー時代、チームの業績が上がらず深く悩んでいた。当時は原因を部下のせいにしていたが、やがて自身のコミュニケーション不足にあると気づき、アドラー心理学やコーチングなどを学び始めた。指導者や教員、親といった人を導く立場の人間にとって、まず「相手の話を聞くこと」がすべての出発点となる。

ワーク1 傾聴力

会話の主導権は「聞き手」にある

「自分モード」から「相手モード」への転換

受講生による対話ワークを通して「傾聴の効果」を体感する実験が行われた。聞き手の態度一つで、コミュニケーションの質は全く異なるものになる。

消極的 (Passive)

真顔・うなずきナシ
あいづちナシ・相手の話に関心をもたない

自分モード (消極的な聴き方)

意識が「自分」に向いている状態



話し手は「もっと聞いてほしい」強いストレス。聞き手は、内容が頭に入らなかった。



積極的 (Active)

笑顔・うなずき・あいづち・相手の話に肯定的な関心をもつ

相手モード (積極的な聞き方)

表情やしぐさまで、意識を「相手」に向けている状態

話し手は、楽しくなり自発的に話が深まった。聞き手は、話の世界に共感して入り込めた。

まずは「自分自身のリーダー」になる

他者を承認し、勇気づけるためには、まず「自分自身とのコミュニケーション」を整える必要がある。失敗した際、自分を上から目線で責め立てる「縦の関係（自分虐待）」をやめ、横に寄り添う「横の関係」に変えることが大切である。



縦の関係 自分へのダメ出し

「なぜできないのか」
「才能がない」と
自分を痛めつける

→心のエネルギーが奪われる

横の関係 自分への勇気

「今はまだ途中 (Not yet)」
「ベストを尽くしたのだから、
またやろう」と認める

→心のエネルギーが満たされ人にも優しくなれる



ワーク2

傾聴力

よかれと思った「アドバイスの罠」

受講生による、仕事の悩みを相談する2つ目のワークが行われた。信頼関係がない中での助言は「北風と太陽」の北風と同じで、相手の心を閉ざしてしまう。

過干渉なアドバイス

矢継ぎ早な指示・解決策

話し手は悩みを半分も話せず、聞き手と目を合わせなくなるほどの心理的抵抗（拒絶）が生じた



ひたすら傾聴

解決しようとせず、ただ状況や気持ちを丁寧に聞く

話し手に深い安心感が生まれ、心の整理がついた結果、話し手自ら「アドバイスを教えてほしい」と求めた

傾聴の極意は「相手を変えようとしない」こと

傾聴の本質は「相手を変えようとしないこと」。丁寧に聴いてもらえたから、相手の話も聴こうと思える心理がある。相手を認め、自立を促す「承認」には以下の4つの段階が存在する。

結果承認：成果や達成を認める

行動承認：努力や工夫、取り組みを認める

思考・感情承認：考えていることや悩み、葛藤などを受け止める

可能性承認：現状だけで判断せず、相手の成長する可能性を信じる

結果や行動が出ない子供に対してこそ、

「感情・可能性」を承認して心のエネルギーを満たすことが重要である。それが、次の自発的な行動・結果へと繋がっていく。

「どんな現状でも、あなたの可能性を

信じているよ」

「承認」と「甘やかし」の違い



甘やかし

過保護・過干渉であり、「まあいいんじゃない」で終わる、次の行動に繋がらないコミュニケーション。

承認

相手の自主自立のための応援。次の行動に繋がるコミュニケーション。可能性を信じているからこそ、安易に妥協させない「愛ある厳しさ」を持つ。

傾聴がもたらす「人が育つサイクル」

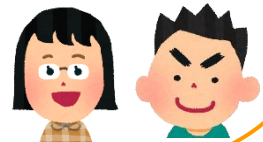
理想的な会話の比率は「聞き手2：話し手8」である。聞き手が積極的に聴くことで、話し手は自分の頭の中で状況を「構造化（客観視）」できるようになる。その結果、本人の中に「気づき」が生まれ、主体的に行動するようになる。これこそが「人が育つ」メカニズムである。

先生

うなずき
共感
質問

子供

自分の言葉でたっぷり話す



理想の会話バランスは「聞き手2：話し手8」

質疑応答

子供に『次どうする？』と聞いても解決策が出ない場合はどうすればよいのか？

いきなり10点満点を目指すのではなく、「今は5点なら、少し良い6点ってどんな状態？」とステップを小さくして想像させる（スケーリング）。具体的なイメージがわけば、子供は答えやすくなる。それでもアイデアが出ない時は、「先生の意見も言っている？」と許可を取ってから選択肢を提示するとよい。



お礼の言葉 静岡県養護教諭研究会 前田 智恵子

相手を承認しながら積極的に話を聞き、相手を変えようとしないうという「傾聴の極意」は、私達が日々子供たちと接する中で何より大切にすべき心のあり方だと強く実感した。日々様々な悩みを抱えて来室する子供たちに対し、今回学んだ心のあり方を意識して実践していきたい。



参加者の感想

- ・失敗した時に、自分を責めて後悔することが多かった。今日のお話を聞いて、自分を励ますヨコの関係の言葉を自分にかけたいと思った。失敗しても大丈夫、次へのステップである、最初から完璧にできるわけがないというスタンスで何度も挑戦していきたい。
- ・傾聴は普段から意識して、大切にしたいと思っていたが、そのメリットが最終的に「人が育つ」ところまで繋がっているとは考えていなかった。傾聴の力が想像以上であることを学んだので、今後はさらに意識して承認のコミュニケーションをしていきたい。
- ・養護教諭として何とかしてあげなきゃと思う気持ちが前に出がちだが、話をよく聞き、承認してあげることや相手が話す時間をゆっくり確保してあげることが大切であると感じた。
- ・「傾聴」は自他ともにメリットがあり、自信と優しさを生み出すものだ実感した。

